

V. Holland 編集『獄中記』後半部分から、ワイルドのキリストについての言及が始まる。それは、キリストと芸術家両者の人生を同一視することに始まり、キリストの資質と芸術家の資質は、共に“imagination”であるとする。この見解は、Paterの影響とする解釈も可能であるが、この様なワイルドのキリスト観に対し、キリストの神聖性無視、と見る批評家もいる。ワイルド自身の言葉によれば、確かに神聖性を否定しているが、『獄中記』においては、更に論を進め、キリストの位置を詩人の中に置き、両者の“imagination”を重要視する。次に、キリストの生涯は、素晴らしい詩であるとし、付け加えて、その詩とは、“idyll”であるとする。この見解は、Carlyleの影響とする学説もある。

次にワイルドは、ロマン主義におけるキリスト像の表出について言及し、続く箇所において、キリストこそロマン主義の“precursor”として、ここから、ワイルドが芸術家としてキリストをとらえていたことがわかる。つまりワイルドにとってのキリストとは、“imagination”を駆使する芸術家としてのロマン派詩人である。この見解は、19世紀末にかけてのキリスト教に対する当時の懐疑心の現れとして解釈も可能である。ワイルド自身の言葉にもあるが、ワイルドは、キリストを神としてではなく、最高の芸術家として信じていた。

しかしながら、キリストとは、“imagination”を駆使する芸術家としてのロマン派詩人というだけでは、『獄中記』におけるワイルドのカトリック志向は明確ではない。カトリック志向と言うからには、ワイルド自身がキリストに対して、何らかの形で自らを重ね合わせる点が必要となる。

もしも、ワイルド自身が、その生涯をキリストと同じく“idyllic”なものにしたならば、キリストを通して、天国への階段を歩んだであろうが、地上においては、Douglasを通して異なる階段を歩んだ。ワイルドの内におけるキリストと、Douglasは常に対立したものとして考えることが可能であり、反キリスト的存在としてのDouglasの位置はとても大きい。Douglasに対し、非難を浴びせ続けることにより、さらに反キリストとしての位置を明確なものにする。『獄中記』において、ワイルドは、1つの神話を形成したと言っても過言ではない。

この神話において、反キリストとしてのDouglasの影響力は、芸術家としてのワイルドのみならず、ワイルドの“imagination”を破滅に導くものとして描かれる。

図式的には、全てを割り切ることは、不可能ではあるが、『獄中記』においては、芸術家としてのワイルドにとって、不可欠な“imagination”を共通項として、ワイルドとキリストとの一体化を読み取ることができる。この反キリストとしてのDouglasから、ワイルドの内なるキリストへと、ワイルドは、脱出を試みる。Douglasには、“imagination”の欠落という言葉浴びせながら。

但し、問題点が残る。ワイルドの“imagination”を邪魔し、破滅させる反キリスト

としてのDouglasに対するワイルドの態度である。ある箇所においては、非難、中傷、そして厳格な態度。また一方で、Douglasに対し、sorrowやhumilityを含む態度や、許そう、許さねばならないとする態度。この相反する2つのワイルドのDouglasに対する態度は、『獄中記』のあちらこちらに散りばめられ、その矛盾が、読者に固定と流動を強いるテキストとなり、当惑させることは、しばしばであり、直線的な「読み」の流れを押しとどめようとする。

しかしながら、この相反する2つのワイルドの態度は、読者を当惑させるのに十分な矛盾ではあるが、この矛盾は、ワイルドの内にもある矛盾でもあり、自己に対しての1つの試練であり、この矛盾の片一方の要素である反キリストとしてのDouglasに対する憎しみを取り除かない限り、憎しみは芸術を破滅へと導くので、*De Profundis*という文字通りの深淵という心の監獄から出獄しなくてはならないことは、ワイルドは自覚していた。

結論として、*De Profundis*は、深淵からのワイルド自身の芸術家としての告白であり、心の変遷記として、また足跡の記録として考えられる。ワイルドは、“imagination”を通じて、キリストに近付こうとするのみならず、カトリックの幾つかの美德でもあり、また聖書の中において、各所に散りばめられているsorrowやhumilityに近付くことにより、カトリックに近付こうとするカトリック志向の要素は、充分にある。

## 藝術にたいする人生の呪いと復讐

西村孝次

(協会顧問・元明治大学教授)

オスカー・ワイルドの場合、いったい人生(現実)と藝術(創作)とはどのような関係にあったのだろうか? どのようなかわりのなかに置かれざるをえなかったのだろうか?

いま、わたしは、かつて少年のころ、ひとりの文学者の講演を京都の基督教青年会で聞いた日のことを思い出す。それは有島武郎(1878—1923)の話であった。すでにかれは長篇『或る女』(1919)や評論『惜しみなく愛は奪ふ』(1920)などを発表して制作活動の絶頂期を迎えていた。また他方、第一次世界戦争やロシア革命や米騒動以来、やかましくなってきた社会運動に刺戟されて、かれはその所有する親ゆずりの農場を解放してユートピア的な共産農園にしようとする理想主義者でもあった。

そのようなかれが、しかし、さまざまな内外にわたる苦悩のため次第に虚無的になり、たまたま当時もっとも新しい進んだ働く女性としてジャーナリズムの草分けのひとりで中

年の美しい人妻波多野秋子との恋愛を契機に、かれは、わたしがかれの講演を後にも先にもただ一度だけ聴いた年の、その翌年、1923年6月9日、かれは軽井沢の別荘・浄月庵で秋子と情死するに至ったのである。

わたしはワイルドの生涯における現実＝人生と創作＝藝術との、ほとんど宿命にも似た対決を考えるたびに、いつもこの武郎の末路を想起しないではいられないのだ。ひそかに巷間伝えるところによれば、ふたりの遺体には蛆が這いまわっており、さらに、1916年に結核を病む妻・安子に死別して以来、きびしい禁欲生活をつづけていたため、かれの男性自身は事に臨んでついに機能しなかった、という。

さて、オスカー・ワイルドの全作品——詩、小説、童話、劇および評論・講演——を通じて、たえず執拗なまでに繰り返しかえし明滅する最大の主題は、まさに人生＝現実と藝術＝創作との、およそ単純でしかも複雑きわまりない相関、ということとあってよいであろう。

たとえば、それはまず評論「嘘の衰退」において提示され、「新しい美学の原理として、つぎの三つが挙げられる。すなわち、1.「藝術」はそれ自身のほかの何物をも断じて表現しない。2.「あらゆる劣悪な藝術は『人生』と『自然』へ還ること、そしてその二つを理想にまで高めることから生じる。」3.「藝術」が「人生」を模倣するよりもはるか以上に「人生」こそ「藝術」を模倣する。これは単に「人生」の模倣本能に由来するのみでなく、「人生」の自意識的な目的は表現を発見することであり、かつ「人生」がそのエネルギーを実現できるようなある種の美しい形式を「藝術」が提供することからも来ているのである」(私訳『ワイルド全集』IV, pp. 47-9)。

いいかえれば「人生とは環境に規制されたものであって、その表現は支離滅裂であり、藝術的で批評的な気質を満足させる唯一のものであるあの形式と精神のみごとな照応に欠けているのだ。人生はその品代には高すぎる代価をわれわれに払わせる、そしてわれわれはこの上なくつまらない秘密を目の玉の飛び出るような値段で買いとるのだ」(同書, pp. 131-2)。そうして、ここでわたしたちは思い出すであろう、ワイルドがアンドレ・ジッドに語った、あの有名な、あまりにも有名すぎる言葉、つまり、「わたしが自分の天賦の資質 *genius* を捧げたのは「人生＝生活」であり、「作品＝藝術」に投じたのは単なる才能 *talent* にすぎない」という冗談めかした打ち明け話を。

これを若いジッドがどう受けとめたかはとにかくとして、わたしたちとしては次のようなワイルドの発言をもまた忘れるわけにいかない——「人間が求めてきたのは、実は、苦痛でもなければ快樂でもなく、ただ『人生』にはかならないからだ。人間は生きようとしてきたのだ、はげしく、ゆたかに、完璧に」(「社会主義下の人間の魂」)。それから、「藝術は人生のために作られるのであって、人生が藝術のためにあるのではない」(「衣服と藝術との関係」『ワイルド全集』V, p. 44)。

このような人生派ワイルドが、なぜ、いまわしい投獄という形で現実人生に敗れさった

のか? なぜ『獄中記』と『レディング牢獄の唄』の作者は出獄後の僅かな余生を流浪と敗残のうちに過ごさねばならなかったのか?

おそらく答は三つしかないであろう。ひとつは「社会はしばしば犯罪者を許しはする。夢想家を許すことは断じてない」(『全集』IV, p. 133)。ふたつは、ワイルドが、とくに劇において、えもいえず魅力的に楽しませてくれたこと、そして、あれほど聡明な人間ワイルドが、その藝術ゆえに人生の現実と迂闊で、そのため恐ろしい呪いと復讐を受けたのである。あの鬼龍院花子の啖呵ではないが、「なめたらいかんぜよ!」

## 『獄中記』について

古川 弘之

(光華女子大学教授)

ワイルドの『獄中記』(*De Profundis*)は3個の点ではじまっていた。これは前に省略された部分があることを示すものであるが、本文のなかにもこの削除を示す3個の点が見られることがある。今日では完本が普及して削除版を手に入れることの方が難しいのであるがロバート・ロス(Robert Ross)が1905年にこのワイルドの手紙を公にしたときはかなり削られたものであった。

その成立について復習しておきたいと思う。タイトルもロスによるものであるがルーカス(E. V. Lucas)がこの「深き淵より」という案を出したのだと言われている。ワイルドは1835年5月25日に2年間の重労働を含む懲役の刑を言いわたされた。そしてレディングの刑務所に移されたのは11月21日である。彼は1837年のはじめに(1月から3月まで)このレディングの刑務所で「愛するボジーよ」ではじまる手紙を書いたのである。二折版の用紙に24枚の長さである。手書きの原稿が一枚書き上げると次に新しい用紙が手渡されるという刑務所内の制度の下で書いていったものである。完成した後に4月1日付でロス宛の手紙は、このアルフレッド・ダグラス宛になっている原稿の処理についてのものである。<sup>注1</sup>

親愛なるロビーよ、わたしは、これとは別の包みで、アルフレッド・ダグラスあての手紙を送る。無事に届くといいが。きみは、またもちろんいつもきみと一緒にしているモア・アディーが、それを読み次第、注意深くコピーしてほしい。